

V 第53回日本磁気共鳴医学会大会の抱負

第53回日本磁気共鳴医学会大会に向けて

——異分野とのクロストーク

第53回日本磁気共鳴医学会大会 (JSMRM 2025) 大会長

三木 幸雄 大阪公立大学大学院医学研究科放射線診断学・IVR学教室

2025年8月29日(金)～31日(日)まで、姫路市文化コンベンションセンター「アクリエひめじ」にて、第53回日本磁気共鳴医学会大会(JSMRM 2025)を現地開催する。本大会のテーマは「異分野とのクロストーク」とした。磁気共鳴(MR)技術のさらなる進化をめざすことはもちろん重要であるが、それと同時に核医学、放射線治療、再生医療、人工知能(AI)など、異なる分野との接点を積極的に見出し、それらの分野におけるMRの新たな応用や、共同研究の可能性を探ることが本大会の大きな目的である。

本大会は、大阪公立大学(元・大阪市立大学)が主管する初めての日本磁気共鳴医学会大会である。実行委員長兼プログラム委員長の立川裕之、秘書の中野寛子、鈴木遥子をはじめとする大阪公立大学放射線科のメンバー、ならびに株式会社コンベンションリンケージとともに、鋭意準備を進めている。

当初は大阪市内での開催を検討していたが、同年に開催される大阪・関西万博(EXPO 2025)と会期が重なることで、参加者が宿泊施設を確保することが困難になる可能性を考慮し、開催地を姫路市に決定した。実際、大阪市内のホテルは予約が難しくなっており、姫路開催とした判断は正しかったと感じている。

会場である「アクリエひめじ」は、2021年9月に開館したばかりの新しい会議場であり、3つのホールと多数の会議室を備えている。大ホール(図1)は、

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団やベルリン・フィルハーモニー管弦楽団が演奏することもある音響に優れた空間であり、中ホール、小ホールでも多くのコンサートが開催されている。椅子の座り心地も快適で、ホールと会議室間の導線も良好である。

本大会のテーマ「異分野とのクロストーク」に関連して、7つのセッション(表1の黄色箇所)を企画している。以下にいくつかを紹介する。

まず、「再生医療とMRIの架け橋」では、再生医療におけるMRIを含めた画像診断の役割について取り上げる。再生医療の現場では、その適応を判断する時点のみならず、治療実施時、さらには治療後のモニタリングに至るまで、画像診断が不可欠となっている。本セッションでは、京都大学iPS細胞研究所所長の高橋 淳先生と京都大学放射線医学講座の三宅可奈江先生にご協力をいただき、パーキンソン病におけるiPS細胞移植、心筋再生プロジェクト、自己骨髄間葉系幹細胞を用いた脳卒中の再生医療、iPS細胞由来軟骨移植、脊髄損

傷への細胞移植における画像診断の応用について、再生医療分野において日本を代表する5名の先生方にご講演いただく予定である。再生医療における画像診断に特化したセッションは、画像診断関連学会・再生医療関連学会を通じても初めての企画であると認識している。

「MRIと核医学で広げる画像診断」では、第65回日本核医学会学術総会(2025年11月13日～15日)の会長である大野和子先生(京都医療科学大学教授)のご提案により、日本磁気共鳴医学会大会と日本核医学会学術総会の両方において、コラボセッションを開催する予定である。日本磁気共鳴医学会大会では、PET装置の基本的知識、PET/MRI装置におけるMRI撮像の特殊性、そして臨床各論についてご講演いただく。

「MRIにおけるAI技術の展望：異分野連携の課題と可能性」では、大阪公立大学人工知能学准教授の植田大樹先生の協力により、諸外国に比べて日本では遅れているとされる、医用画像AI分野における医工連携、産学連携をいかに推進するかという観点から、課題と打開

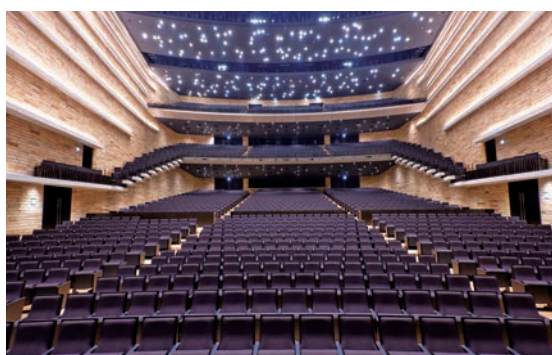


図1 アクリエひめじ大ホール
(筆者撮影)